

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	甲医第 1590 号	氏 名	大倉 佳宏
審査委員	主査 沼田 周助 副査 岡久 稔也 副査 栗飯原 賢一		

題目 Factors associated with anxiety and depression among caregivers of patients receiving medical home visits
(訪問診療を受けている患者の家族介護者の不安と抑うつに関連する要因について)

著者 Yoshihiro Okura MD, Chisato Takeuchi MS, Harutaka Yamaguchi MD, PhD, Kenji Tani MD, PhD
 2023年9月発行 The Journal of Medical Investigation
 第70巻 第3,4号 443ページから449ページに発表済
 Article number: 70-097R1
 (主任教授 森岡 久尚)

要旨 がん患者、脳卒中患者、認知症高齢者等の介護者の不安や抑うつと、介護者の健康状態、経済的要因などとの関連が報告されている。しかし、訪問診療を受ける高齢患者の介護者については報告が見当たらない。そのため、この関連を調査することを目的とした。

申請者らは、徳島県内の医療機関から定期的に訪問診療を受けている患者の家族介護者（同居家族又は週1回以上患者宅を訪れる別居家族）を対象に、当該医療機関を通じて、2019年6月から7月にかけてアンケート調査を実施した。不安と抑うつの評価は、Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS) 日本語版のサブスケール (HADS anxiety 及び HADS depression) の各7項目21点満点のうち8点以上を不安、抑うつと判定した。また、在宅医療環境に関する家族介護者の認識を5段階のリッカート尺度で評

価した。その他、家族介護者及び患者の基本的な情報を収集した。そして、不安及び抑うつの有病率と、それらに関連する家族介護者の認識を chi-square test 又は Mann-Whitney U test を用いて検討した。さらに、不安及び抑うつを従属変数、社会人口学的因子、関連する家族介護者の認識を説明変数とする多重ロジスティック回帰モデルを用いて検討した。

家族介護者 203 人から回答を得て（回答率：53.6%）、173 人を解析対象とした（うち女性 125 人、平均年齢 66.2 歳）。なお、患者は 173 人（うち女性 106 人、平均年齢 81.8 歳）であった。得られた結果は以下の通りである。

1. 不安及び抑うつの有病率は、それぞれ 43.9%、69.4%であった。また、両方に該当する者の割合は、27.2%であった。
2. 不安のある者の割合は、患者が有する疾患数が多い場合に有意に高くなった ($p < 0.05$)。
3. 不安のオッズ比は、「安定した家計」(odds ratio: OR) : 0.69、95% confidence interval: 95% CI) : 0.48-1.00) と「安定した介護者の健康」(OR : 0.45、95%CI : 0.30-0.68) で有意に低くなった ($p < 0.05$)。また、抑うつのおッズ比は、「安定した家計」(OR : 0.60、95%CI : 0.38-0.93)、「安定した介護者の健康」(OR : 0.49、95%CI : 0.30-0.81)、「安定した患者の状態」(OR : 0.51、95%CI : 0.29-0.92) で有意に低くなった ($p < 0.05$)。

以上の結果より、訪問診療を受ける高齢患者の家族介護者においても不安や抑うつのある者の割合は高く、それらは、経済的負担や家族介護者の健康と関連していることが明らかとなった。本研究は、地域包括ケアシステムの構築に資する研究であり、その社会的意義は大きく学位授与に値すると判断した。